

介護雑感

札幌市医師会
さっぽろ幌西クリニック

笠井美智子

私の介護の原点は、緑内障で視力を失い、日常生活動作が困難になった祖母との生活にある。小学生だったある夜のこと、下剤を常用している祖母が寝床の側にあるおまるの手前で粗相をした。父の祖母への怒声が悲しく、とっさに素手で便を掬い取ったことだった。その後祖母は長い孤独の時を経て自死した。

現在の私は71歳の時に立ち上げた地域密着型デイサービスの管理者を兼務している。78歳となった今、利用者の方々とほぼ同年代となった。

定員10名以下の小さな施設であるが、人数が少ない分お互いの距離が近く、すぐに家族のような関係が成立する。持論ではあるが、ポストの数ほどこのような規模の施設があると生活の場から離れることなく利用できる。しかし現実には効率重視の観点から集約化に向かっている。

運動機能訓練や個別機能訓練、口腔ケアや栄養管理、ADL等、すべて加算方式で1にも2にも記録、記録、記録。ほとんどの利用者が移動困難にも係らず、最も重要で安全な介護を要する送迎サービスが給付の対象外というのも納得がいかない。それでいて送迎をしなかった場合は減算するというのも釈然としない。屈託なく笑って一日を過ごされ、帰宅前の1時間ほどは脳トレと称してトランプや百人一首などで盛り上がり、お互いに別れを惜しんで帰宅の途に就く、その際も送迎車の中では一日の楽しかった事々で話は尽きない。70年以上前の祖母の孤独はこの制度で解消したであろうか。今も日々考えることである。

最後に、利用者の中に106歳の女性がおられ、その若々しさに私たちは他の利用者の方々と向後の目標にしたいと話しているが、なんと、その方はこう言われた。「面白すぎて死ぬ気がしない！」と。NHKにこういう方をこそぜひ取材してほしい旨の依頼をしたが、いまだに梨のつぶてである。

親子育て

札幌市医師会
東苗穂病院

星野 拓磨

イクメンという言葉ももう死語かもしれないが、私も自称イクメンである。私には今年5歳と7歳になる子供がいるが、子供と過ごす時間は大変充実しており、あっという間である。平日は寝るまで遊び、休日はサッカー・野球・自転車・動物園・水族館・ドライブなどなどして過ごし、休日前は何して遊ぶか考えて楽しく忙しい。親になると、自分が子供としたいことがたくさんあることに気づいた。一緒に映画を観たり、戦隊ヒーローごっこをしたり、自分の好きな本を教えたり、習い事を一緒にしたり、料理を一緒にしたり。

どんどん一緒にやりたいことは増えていって、自分がやりたいことを子供と一緒にやっているのだから子供と遊んであげているというより、自分が遊んでもらっているのかもしれない。同じ遊びをしても日々成長していく子供たちと過ごすとは全く同じ日はなく、日常会話でも、急に大人びたことを言ったりするので面白くて楽しい。一日という時間の貴重さを教えてもらっているような感覚になる。自分が大人になって仕事も当たり前、子育ても当たり前にするものと自然に思っていたが、思っていた以上に仕事も子育ても忙しく楽しいものだ日々実感している。

子育ての話をする、今が一番いい時期だと言われることもある。もちろんこれから成長するにつれ、いろいろな壁があるかもしれないが、これから一緒にしたいことのひとつには、子供が壁にぶつかったりしたときに、一緒に悩んだりすることも自分が親にしてもらったようにしてあげたいと思っている。仕事と同様に子育ても、悩んだり、全力を尽くして向き合って楽しむべきだと思う。まだまだ、一緒にゴルフをしたり、進路でともに悩んだり、彼氏彼女ができるかドキドキしたり、やりたいことはたくさんあって一緒に成長していきたいと思っている。一緒に成長しているのだからそういう意味で子育てというより「親子育て」かもしれない。これからも親子育てを悩み楽しみながら過ごしていきたいと思っている。

明日は夕張でスキーと一緒に、自分も一から学び直す予定である！